特許検索競技大会

－ 特許検索競技大会2018最優秀賞受賞者　特別鼎談 －

近年の特許情報を取り巻く環境

PSGP
Patent Search Grand Prix

2019年8月

IPCC

一般財団法人 工業所有権協力センター
Industrial Property Cooperation Center

－ 特許検索競技大会2018 最優秀賞受賞者 特別鼎談 －

近年の特許情報を取り巻く環境

特許検索競技大会２０１８　最優秀賞受賞者　森田健介
特許検索競技大会２０１３　最優秀賞受賞者　涌井利果

（はじめに）

近年、特許情報を取り巻く環境は海外文献の増加やIoTをはじめとした複数技術分野の融合化、AIツールの台頭等によりめまぐるしく変化してきており、これに伴い特許調査スキルもより高いレベルが求められるようになってきている。

このような状況のもと、特許調査への関心の高まりから、特許検索競技大会への参加者は年々増加してきている。しかし特許調査に求められる知識や能力も変化してきていることから、特許検索競技大会2018で最優秀賞を受賞された森田健介氏と、同大会2013で最優秀賞を受賞された涌井利果氏に、受賞から今日までの特許調査業務における変化や、今後の調査業務において求められる能力等について、IPCC 調査業務センターの電気部門長である山田洋一がお話を伺った。

（自己紹介と業務内容について）

【山　田】森田さん、まずは特許検索競技大会2018での最優秀賞の受賞、おめでとうございます。本日は、近年の特許情報を取り巻く環境の変化というテーマについて、森田さんと涌井さんにお話を伺いたいと思います。まずはお二人の自己紹介からお願いします。

【森　田】富士フイルム知財情報リサーチ株式会社の森田です。調査分析ユニットで主に特許調査の仕事をしており、特許調査自体は5年ほど従事しています。よろしくお願いいたします。

【涌　井】株式会社ワイゼルの涌井です。調査部バイオ・医薬・化学課に所属しており、特許調査は12年目になります。

【山　田】ありがとうございます。森田さんは、普段どのようなお仕事をされていますか。

【森　田】普段は、侵害予防調査や無効化資料調査、技術調査等の実務をしております。また、社内で特許調査に関する知見等を共有化するためのシステムを構築したり、富士フイルム知財部員の調査に関する教育を担当したりしています。

【山　田】富士フイルムのグループ会社からのお仕事が多いですか。

【森　田】はい。富士フイルム株式会社からの依頼が中心ですが、最近では富士フイルム株式会社以外のグループ企業からもお仕事をいただいています。

【山　田】ありがとうございました。それでは、涌井さんは普段どのようなお仕事をされていますか。

【涌　井】弊社は、独立系の調査会社であるため、色々なお客様から個別にご依頼をいただいています。主に、侵害予防調査や無効化資料調査を行っております。出願前調査も行っておりますが、出願前調査も含め最近はお客様ご自身で調査されていることが多いため、弊社にご依頼いただく案件は、なかなか無効化できない特許であるとか、海外で侵害予防調査をしたいけれど慣れていない等、お客様が困った場合のご依頼が増えてきているように感じています。

森田　健介（もりた　けんすけ）
富士フイルム知財情報リサーチ株式会社
調査分析ユニット　エキスパート
特許検索競技大会２０１８最優秀賞受賞
ゴールド認定（化学・医薬分野）

（受賞後の変化について）

【山　田】森田さんは、これまで特許検索競技大会でゴールド認定を3回、シルバー認定を2回、計5回の認定を受けておられますが、昨年の特許検索競技大会2018で最優秀賞を受賞された後、ご自身の身の回りの変化はありましたか。

【森　田】5年前に初めて特許検索競技大会に参加して、ゴールド認定をいただいた時には、社内外にかなりのインパクトがあったと記憶しています。5年前は、グループ会社内に調査会社を立ち上げてまだ数年で、私自身も調査を始めてから1年ほど経った時でした。グループ会社の中で初めて調査会社を設立したものの、他の調査会社や、グループ会社内の調査担当者と比較して、自分たちの調査レベルがどの程度であるのかがわからなかったこともあり、会社としてのアピールポイント等を模索していたところでした。そのような時期に、権威ある「特許検索競技大会」にて弊社内でゴールド認定を同時に2名受けたことから、胸を張って、自分たちのレベルをアピールできましたし、弊社が「スキルの高いプロフェッショナル集団」としてグループ内で認知されるきっかけになりました。

　また、今回、最優秀賞をいただき、新聞やHPに自分の写真が載ったことにより、社外活動等で知り合った方等からも、反響がありました。いただいたトロフィーは弊社応接室に飾ってあって、お客様が来られた時等にさりげなくアピールしています。このように特許検索競技大会の成績を有効に活用しています。

【山　田】ありがとうございます。涌井さんは特許検索競技大会2013で最優秀賞を受賞されて約6年経過しましたが、その後変化はございましたか。

【涌　井】最優秀賞をいただいた後、弊社社長から「上級特許検索アドバイザー」という肩書きをいただきました。受賞前よりも自身の責任感が増したように思います。

【山　田】御社のホームページでは、涌井さんに関する記事が掲載されていて、会社としても全面的にアピールしていますね。

【涌　井】そうなんです。特許検索競技大会の知名度が向上してきたこともあり、初めてお会いするお客様からは、最優秀賞の受賞により信頼をいただけるようになりました。また、特許検索競技大会2013で最優秀賞を受賞した後は、社外活動においてもサーチャーの集まりで講演の依頼を受ける等、多方面の方とのお付き合いも増え、自分の視野も広がったと感じます。

【山　田】なるほど、お二人ともご自身に変化があると共に、会社への貢献も大きいということですね。

山田　洋一（やまだ　よういち）
一般財団法人工業所有権協力センター
調査業務センター　電気部門長

（業務でのやりがい）

【山　田】続いて、お二人の業務内容をもう少し詳しく教えてもらえますか。

【森　田】富士フイルムの研究所にて約20年有機合成による材料開発を担当した後に知的財産部に異動となり、特許出願や権利化業務を5年程行い現在の調査業務に就いております。

【山　田】そうなのですね。その調査業務においてご苦労されていることはありますか。

【森　田】お客様からの依頼内容が漠然としている時が一番困ります。何がポイントでどの範囲を調べてほしいといわれているのか分からない時がありますが、そういった時こそ熟練サーチャーの腕の見せどころであり、まずは相手の要望を引き出す様に話を聞くことにしています。

【山　田】確かに、そのような場合は忍耐強く、コミュニケーションをとっていく必要がありますね。

【森　田】そのとおりで、お客様から、「これからこんなことをやりたいけど、この辺の特許はどうなっているの？」といった相談を受けることがあります

が、それが侵害予防調査なのか、先行技術調査なのか漠然としたご依頼で、どのようなアウトプット（調査報告書）にすればよいのか悩むことがあります。
【山　田】なるほど、それはなかなか難しいですね。涌井さんの会社ではいかがですか。そのような依頼はあるのでしょうか。
【涌　井】弊社では、お客様からご依頼内容と齟齬がないように見積書にご依頼内容を明記し、また、弊社で実施する調査の範囲も明記するようにしています。例えば、調査自体を初めて依頼される方ですと、どのように依頼すればよいかわからない場合がありますので、出来る限りニーズをお聞きして、弊社の方から侵害回避調査と先行技術調査の両方の実施をご提案する等、丁寧に対応するよう心掛けています。調査結果を納品した後、その調査案件が最終的にどうなったか等のフィードバックをいただくこともありますが、弊社のような独立系の調査会社の場合は頻繁ではありません。森田さんの会社のようにグループ企業となれば、その後も状況を把握でき次のアクション対応等一連の流れをパッケージとして築くことができますね。

涌井　利果（わくい　りか）
株式会社ワイゼル
調査部　バイオ・医薬・化学課　課長
上級特許検索アドバイザー
特許検索競技大会２０１３最優秀賞受賞
ゴールド認定（化学・医薬分野）
特許検索競技大会２０１８ゴールド認定
（化学・医薬分野）

（近年の特許情報を取り巻く環境について）
【山　田】特許行政年次報告書によると2018年の中国の特許出願は154万件、一方、日本では31.4万件であり[※1]、直近のデータでみれば中国の特許出願件数は日本のそれと比べて約5倍となっています。分野にもよると思いますが、お二人が外国特許文献をサーチする際、中国文献を注視するような傾向はありますか。
【森　田】分野によります。医薬の分野でみれば全世界に出願するため、必ずしも中国だけを調べる必要はありません。
【山　田】中国特許文献に特化して調べなくともパテントファミリー調査をすれば自然とヒットしてくるということですか。
【森　田】分野や状況によっては特に中国を重点的に調べることもあります。例えば、国内で販売していた商品を新たに中国で販売するという話になると、中国の侵害予防調査を行うことがあります。
【山　田】ありがとうございます。涌井さんの会社ではいかがですか。
【涌　井】中国での侵害予防調査依頼はあります。確かに中国特許文献を見なくてはいけないことが多くなっていると思います。

（外国特許文献の調査について）
【山　田】たしかに、中国でこれだけ多く特許出願されると、その分特許権も多くなるでしょうから、侵害予防調査も大切になるということですね。IPCCでは、機械翻訳データを使用して中国特許文献を調べていますが、森田さんの会社では中国特許文献をどのように検索されていますか。
【森　田】まずは英語で調査しますが、中国語での言語検索を少しずつやってきています。日本語で入力すると中国語の特許文献がヒットするツールがあるので、そこから中国語のキーワードを拾える機能があります。
【山　田】日本語から中国語に変換してそれが検索キーになるのですね。機械翻訳では不安がありますか。
【森　田】機械翻訳は誤訳が多いという話を聞いたことがあります。
【山　田】そうなのですね。中国語から英語への機械翻訳は相性が良いとも聞きますね。涌井さんの会社ではいかがですか。
【涌　井】弊社では、中国の侵害予防調査をするときは中国語検索を併用することをお勧めしてい

ます。特許の場合は、ファミリー検索で補充できますが、例えば日用品等の分野では実用新案が中国単独で出願されていることが多いので、中国語での検索が重要となってきます。

また、先行技術調査という観点では中国の実用新案を見る必要性は低いかも知れませんが、侵害予防調査の場合は、実用新案の調査も重要になってきます。

【森　田】中国の特許、実用新案のIPCは上位の分類しか付与されていない場合があり、サーチする際は絞り辛くヒット件数が増えがちです。米国特許の2倍3倍の手間をかけても、中国特許文献を網羅的に調査するかどうかの判断が重要だと思います。依頼内容にも依りますが、特定の分野・企業へ絞り込むことも必要だと思います。

【涌　井】中国特許庁でもCPC分類を付与していることは聞きますが、どれくらい付与されているか確認した上で調査することが必要ですね。今は、J-PlatPat でも日本語で検索ができるので、多くの方が中国特許文献に触れることができますね。

【山　田】そうですね。最近では、アセアン特許の調査に関する研修を開いた団体もあるようですね。シンガポール、フィリピンは、アメリカからの出願が多く、インドネシア、タイ、マレーシア、ベトナムは日本からの出願が多いそうですが、アセアン特許を調査することはありますか。

【森　田】調査対象が全世界の場合、商用特許検索データベースを用いて英語で調査する際に対象国を全選択していますが、アセアン各国の実際の収録状況については確認していません。正直、現状不十分なところだと思っています。

【山　田】涌井さんはどうですか。

【涌　井】私が最優秀賞を受賞した後、アセアンの侵害予防調査のご依頼が増えてきました。対象国を指定する調査依頼を受けた場合は、商用特許検索データベースのほか、同国の特許庁のウェブサイトやWIPO PATENTSCOPE等を併用しています。

【山　田】調査するときの言語は、現地語ですか。

【涌　井】シンガポール、フィリピン、マレーシアは英語で調査できますが、タイ、インドネシア、ベトナムは、現地語も使用して検索しています。請求項のテキストデータそのものを検索することができない場合が多く、主にタイトルと要約を対象としたキーワード検索となってしまうため、検索方法に注意が必要です。今後、商用特許検索データベースが充実してくると思うので、より網羅的な調査ができるようになるのではないでしょうか。

（特許検索における人工知能（AI）の可能性について）

【山　田】さて、幅広い分野で活用が見込まれているAIをサーチツールとして使うことについて、お二人はどのようにお考えでしょうか。森田さん、いかがですか。

【森　田】進歩の著しい分野で、今後も更なる進歩が期待できると考えています。ただ、できないことや限界も同時にいくつか見えてきているように思います。1つめは、漏れの無い調査ができるようなものではないこと、2つめは、人によるデータの入力が必要であることです。人手でデータを作り、入力するという作業は今後も残ると思います。例えば、依頼者の要望に対して検索式を作って調査をする際に、人であれば依頼者の意向を勘案することもできますが、AIでは難しいと思います。

【山　田】特許検索においてプロセスが重要だが、AIだけではそれを実現できない、ということですね。

【森　田】はい。AIは補完ツールとしてはかなり有望であると考えています。例えば、特許分類とキーワード等を組み合わせて検索式を作成すると、予想外の特許分類が付与されている場合サーチ漏れが発生してしまうことがありますが、AIなら別の評価基準に基づいて、高いスコアを付与する可能性があると思います。人手サーチの補完的な役割としてAIを活用することは有益なものであると思います。

【山　田】ありがとうございます。涌井さんはいかがですか。

【涌　井】私は、AIツール自体を使ったことはあり

ませんが、やはりAIのみで調査をしても限界があるのではないかという思いはあります。人がサーチをする際の補完的なツールとしてAIを使っていければとても役立つツールになり得ると思います。

（特許検索競技大会に参加して）

【山　田】森田さんは2014年から特許検索競技大会にご参加いただいておりますが、参加する意義やモチベーションをどのようにお考えですか。

【森　田】普段の業務では、自分のスキルを客観的に評価する機会がないので、社外の方と世代を超えて公平に同じ土俵で競える検索競技大会をとても楽しみにしています。特許調査以外の業務をしている人からは、特許検索競技大会のような場があること自体を羨ましがられます。腕に自信を持っている方は、それを公の場で証明することができますし、調査スキルを向上させたい方は自分の弱点を知る良い機会ですので、積極的に参加されるとよいと思います。

【山　田】確かにそうですね、サーチャーは、依頼案件に対しひとつの答えを出すわけですから、同じ案件を大勢で解いて同じ答えになったり、違う答えになったりするといった経験はないですよね。同じ問題で大勢の参加者が競い合う、というものはありませんよね。

【涌　井】普段の調査業務で、何とかできるようになりたい、知恵が欲しいと悩んでいる人の気付きになると思います。色んな人の検索手法に触れる良い機会になり、悩んでいる人でも自分が意外とできていたことや、実は皆同じように悩みを抱えていることに気付くことが大事だと思います。

（これからの特許検索競技大会へ期待するもの）

【山　田】これからの特許検索競技大会がこうなると面白い等の考えをお持ちですか。

【森　田】できればですが、時代を先取りするような技術に関する問題を出していただけたら良いですね。

【山　田】なるほど。時代を先取りする技術ですか、なかなか難しそうですね。それは、解いて面白いということですか。

【森　田】それもありますが、近年の大会では、成績上位陣がある程度固まってきた印象を受けています。今までと違う問題の傾向や、最新の技術が出題されると、シャッフルされて面白くなるのではないでしょうか。

【山　田】ありがとうございます。涌井さんは、今後の特許検索競技大会が面白くなりそうなアイデアはございますか。また、涌井さんご自身は2013年大会と2018年大会に参加されて、2回ともゴールド認定を受けられていますが、社内勉強等をされたのでしょうか。

【涌　井】様々な人が特許検索競技大会に参加

【特許検索競技大会とは】

特許調査能力の客観評価と優秀者及び優秀団体の顕彰等を通して、特許情報業界のすそ野拡大と特許調査に関する技術の普及啓発・向上を促すことにより、我が国のイノベーションの促進に寄与することを目的として開催している大会です。本大会では初心者向けのスチューデントコースと、上級者向けのアドバンストコースの2コースを設けており、一定レベルの結果を得た方には認定証を交付するほか、アドバンストコースにおいては、特に優秀な成績を収めた方および団体の表彰を行っています。

特許検索競技大会2018は、平成30年9月1日（土）に東京・名古屋・大阪・福岡の4会場で同時開催するとともに、スチューデントコースについては、Web化を通じて大学や高専のパソコン教室において希望の日時に行うサテライト開催を実施しました。会場開催（スチューデントコースとアドバンストコース）、スチューデントコースのサテライト開催を合わせて510名が参加しました。

していますが、私も含め何かしらの知恵や知識を身につけたいと思っている方や、そもそも特許調査は何をすればいいのかわからないという方もいらっしゃると思います。そういった意味で、昨年度より特許調査入門編ともいえるスチューデントコースをサテライト開催（大学等の施設内で任意の時期に大会に参加可能）としたアイデアは素晴らしいと思います。実際に参加して、他の人と比較して気付くこともあると思いますし、自信が無い人も自信を付けるよい機会だと思います。

2018年の大会のときは、特許検索競技大会について社内での情報交換会もありましたので、周りの人達のおかげで5年間のブランクを感じずに臨むことができました。

【山　田】先ほど特許検索競技大会は上位層が固まってきていて、一方で下位の人たちも悩んでいて認定を受けるまでが結構大変というお話もよく聞きますが、スキルアップに悩める人たちに何かアドバイスがあれば良いと思うのですが、森田さんいかがでしょうか。

【森　田】精神論としては、良い検索式を作ることに熱意をもつことが肝要だと思います。

【山　田】良い検索式を作るためにどのようなことをされていますか。

【森　田】実際に検索式を作る際には、検索⇔フィードバックを何度も何度も繰り返します。ほとんどの場合、知りたいことは検索結果の中にあります。どの特許分類を使用すべきか、どのようなキーワードがどのような使い方をされているか、検索式で切り分けるべきノイズはどのようなものか、等を検索結果から抽出して、検索式を修正していきます。

【山　田】検索式の作成にあたり流れはありますか。

【森　田】私の場合は、まずはキーワードで濃い集合を作り、商用特許検索データベースの分類ランキング機能を用いて特許分類を拾います。検索結果の集合が予想したイメージと合わない場合は、どの点がダメなのかを考えて修正する、を繰り返しています。

【山　田】特許検索競技大会の問題は、昔と今ではその出題内容が難しくなっていると聞きますが、いかがでしょうか。

【森　田】問題の性質が変わって来たような気がします。以前は知識があれば解けましたが、ここ1～2年は従来と異なり、進歩性の考え方まで厳しく問われているような気がします。

【山　田】知識と言うよりは考えさせられる問題となっているのですね。

本日はお忙しい中、鼎談にご参加いただき、興味深いお話や貴重なご意見、誠にありがとうございました。

【引用文献】

[※1] 特許庁　特許行政年次報告書2019年版

【表紙（写真）】

左：特許検索競技大会2018
金澤　祐孝　大会実行委員長

右：特許検索競技大会2018
【最優秀賞受賞者】 森田　健介氏

IPCC
一般財団法人 工業所有権協力センター
Industrial Property Cooperation Center

〒１３５－００４２　東京都江東区木場一丁目２番１５号
深川ギャザリア　ウエスト３棟
ＴＥＬ　０３－６６６５－７８７７
ＵＲＬ　https://www.ipcc.or.jp